

「ナル表現」研究の現在と課題

—通言語学的に考える—

守 屋 三千代

要旨

本稿は筆者が進める「ナル表現の認知言語学的研究—類型論を視野に入れて—」の成果をふり返し、「ナル表現」研究のあり方を考察するものである。ユーラシアでは「ナル表現」専用の「ナル／ナル相当動詞」を持つ言語が多数観察され、日本語同様に変化の意味も観察される。ただし、日本語の「ナル」は語彙的動詞であり、主たる意味はモノやコトの変化・推移に傾斜し、そのためコンピュータの用法への抵抗感があるのに対し、「ナル相当動詞」は語彙的動詞の用法、機能動詞、受動表現・自動詞を作る接辞の用法も発達し、意味も出来→存在、さらにコンピュータの用法を有する。こうした相違をふまえて通言語的研究を進める必要がある。

キーワード：「ナル」・変化・推移・出来・存在

1. 日本語の動詞「ナル」と意味的な特徴

「ナル表現」および動詞「ナル」は、池上（1981）の指摘以来、類型論的な観点から見た日本語の言語的特徴の指標として取り上げられてきた。「ナル」の辞書的意味は、山口・秋本（2001）では、「生まれる、生まれ出るの意は、実がなる、実を結ぶと同様に、この語の原義と考えてさしつかえがないだろう。『なる』は親から生まれることをいう。生まれることを『ある』とも言い、『生まれる』とも言うので、『なる』の語義はあるものから次のものへと状態が変化することを表現する語として使われるようになったと見られる。（中略）結果として現れた事柄によって、希望していたことの実現、しとげる、できるなどの可能の意味が派生する」としている。つまり、「生まれる」という意が原義であるとし、それが「変化」を意味する語に変わったと指摘している。実際、現代日本語では「無

から生まれる」の意味で「ナル」が使えるのは「実がなる」以外ではほとんど見当たらず、基本的に変化を表すと考えて良からう。

「ナル」の辞書の意味を幅広く捉えた例もある。北原（2010）では、「生る：草木の実ができる。結実する。成る：「成す」の自動詞形、自然のなりゆきで推移変化して別の状態が現れる意、とし、「成る」は①成立する・実現する。②いくつかの要素からできている。③人の仕事によって作られる。④変化して別の物事に至る。⑤時間が経過してある時期・時刻、天候などに移る。⑥ある要件を満たしたために、一定の罰則が適用される「犯罪になる」⑦あるものが一定の重要な役割を果たす「参考になる」⑧物事がそのように決まる「集合場所は～になる」⑨ある数量に達する「合計して～になる」⑩ふさわしい価値が成立する「絵にナル」⑪「お世話になる」⑫「横になる」⑬「気になる」⑭「歩が金になる」⑮「おなりになる」などの例を挙げている。少なくとも⑥～⑮の用法は従来のようなモノ自体の変化ではなく、話し手や当事者を取り巻く事態の次段階への移行が「ナル」の対象として取り上げられている。これは、事態の移行に伴う話し手の認知的な時間経過を、変化に要する時間的経過に置き換えることで、疑似的に「変化」を成立させる用法であり、結果的に「ナル」の「変化」の意味拡張を可能とした用法だと考えられる。これは現代日本語の「ナル」がいかにか「変化」の意味を本義としているか、日本語話者がいかにか内的な時間の経過を意識において事態を捉えているかを示唆していると言えよう。

2. ユーラシアの「ナル表現」と「ナル相当動詞」

「ナル表現」専用の「ナル／ナル相当動詞」は、少なくともユーラシアでは、韓国語（以下、韓）・モンゴル語（蒙）・ヤクート語（ヤ）・トルコ語（土）・シンハラ語（シ）・ドイツ語（独）などで観察される。これらの「ナル相当動詞」と日本語の「ナル」との意味・用法上の共通点は次の通りである。（守屋 2016）

1. 変化の表現を有する。（日韓蒙ヤ土シ独）日本語以外の言語は主格／ゼロ格を取る。

外的変化：例：時刻や季節が一定の段階に達したことを意味する。（日韓蒙ヤ土シ独）

内的変化：例：人が一定の年齢や立場等に達したことを意味する。（日韓蒙ヤ土シ独）

ただし、名詞の格は日本語が到達点の場所格を取るのに対し、日本語以外ではゼロ格あるいは主格を取り、変化・結実・出来を問わず、「～ゼロ格／

「ガ格ナル」を基本とする。つまり、日本語の「～ニナル」のような到達点の格を伴う用法は、ほとんど見られず、この点で変化よりも、新事態の出来により傾斜していると考えることができる。

2. 「実がなる」のような結実の用法を持つ。(日蒙竹土シ) この場合、日本語もガ格を取る点で他言語と共通するが、日本語以外は「成長」「成熟」を意味し、日本語のように「実」が木になる果実であるなどの条件を持たない。その代わりに、収穫に値する程度の量であるという条件を満たす必要があり、そこに相違が見られる。新事物の出来という点で、この用法は誕生に関連する。日本語では主に『古事記』に神の誕生に限って「ナル」が用いられる例が見られるが¹⁾、現代語では用例は見られない。これに対し、蒙竹土シでは誕生にナル相当動詞が用いられている。
3. 2に関連して、蒙竹土シのように出来・存在にナル相当動詞が用いられる言語では、移動を伴う存在(「明日は学校にいる」「あなたもパーティーに行く／来る?」)の表現が見られる。しかし現代日本語では、この用法は古代の「殿様のおなり」のような表現以外に見られない。²⁾
4. 旧約聖書創世期の冒頭に見られる神の言葉である「光あれ。光あった」の箇所でも竹土シ独では「ナル相当動詞」が用いられる。つまり、[出来／出現→存在]の表現が発達している。この点、日韓蒙では存在動詞「ある」のみが用いられ、「光なれ、光なった」と訳すことは難しい。(守屋 2017)

このような新事物の出来の表現が良く見られること、さらにこうした「神の言葉が出来→存在を表す」ということは宗教的観点に基づく万物の創世の意味を示す点で、極めて示唆的であるとともに、日本語の「ナル」の発想との根本的な相違を示していると思われる。従来、「ナル」は一般に英語の「スル」との相違を示す指標として捉えられてきた。それが「ナル的言語」の発見に伴い、それらの言語との近似性や連続性に注意が払われがちとなったが、今後はむしろ根本的な相違に目を向ける必要がある。

4. 韓蒙土シでは、日本語の「しなければナラナイ」といった不可避に基づく義務の表現が同様の形式で表現できる。³⁾ さらに、これらの言語では単独で「(しては) ナラナイ」と禁止の表現をすることができ、「(しても) ナル」といった許可の表現も見られる。(守屋 2016) これらは現代日本語では用いられないが、このことは日本語が否定表現に傾斜しやすいことを裏付けるとともに、人為的及ばぬ抑止力が働いたかのような意味でのみ用いられている。一方、これらの「ナル相当動詞」では肯定形で許可を、その否定形「ナラナ

イ」では禁止を表現する点で、これらの「ナル相当動詞」は事態出来の可否を客観的に表し分けている可能性がある。この点でも、一見似ていると見えるが、背後にあるもの―事態把握―は同一ではないと考えることができる。(守屋 2016)

5. 韓土シ独では「ナル相当動詞」は機能動詞としても用いられ、スル相当動詞と対立する。一方、日本語では「ナル」は機能動詞として用い難く、形容詞以外は通常「スル」を伴う。例えば日本語では「立候補する」「当選する」などとスル表現・ナル表現いずれも機能動詞「スル」を伴うが、例えば韓国語ではこの例の前者は「スル相当動詞」が、後者は「ナル相当動詞」が用いられる。(守屋 2016) 同様に、ナル相当動詞が自動詞や受身文を作る接辞/補助動詞としても機能する。

以上からわかることは、日本語の「ナル」とユーラシアの「ナル相当動詞」およびそれによって実現する「ナル表現」との間には、事態の捉え方、および意味・用法の点で根本的相違があるということだ。すなわち、日本語の場合は対象を話者自身や話者を取り巻く事態、あるいはその事態において認知し、取り上げた「モノ」を、基本的に変化という方向で捉えることを好むのに対し、他のナル的言語は対象を話者とは切り離された「モノ」として捉え、その出来・存在や質的变化という方向で捉えることを好むという違いである。

他言語の「ナル相当動詞」は実質動詞であるとともに、機能動詞や受動表現・自動詞を作る接辞や複語尾としての用法を有し、文法的にも抽象化が進んでいる。このことが、出来が存在につながるという概念に至ると考えられる。このため、変化の表現は個々の出来の連続であり、そのためゼロ格や主格をとり、いわばデジタル的な変化の捉え方だと考えられる。つまり、ユーラシアのナル的言語では変化とは出来の連続を意味する可能性が高い。そしてこれらの言語では「ナル相当動詞」がコンピュータを表す傾向が比較的顕著に見られるが、これは「出来→存在」が連続しない場合だと考えられるのではないか。これに対し、日本語の「ナル」は機能動詞となることを、長い間いわば拒否してきた稀有の動詞であるが、モノの変化から話者の内部で認知される時の経過を変化の過程と拡張することで、「ナル」の意味用法を広げてきたと考えられる。従って、日本語では「変化」がデフォルトであり、それほど日本語では変化への傾斜が強いため、「ナル」によるコンピュータの用法がいまだに強烈な違和感となっているものと思われる。⁴⁾

4. 「スルの言語」英語の場合：'be' の「ナル」表現

池上 (1981) は、英語は「スルの」表現を好む Do-language であるのに対し、日本語は「ナル的」表現を好む Be-language であるとし、世界の言語を「スルの言語 VS ナルの言語」の傾向を指標として、類型論的に捉えることを目指す。確かに日英語の場合、スルとナルの対立は明らかである。よく引かれる例として次が挙げられる。

1. ナル表現： 春に なった。
 [到達点] [自動]
 スル表現： Spring has come.
 [主語] [自動]

しかし、英語の「ナル的表現」という観点から見直すと、次のような問題が顕在化する。

- 1' It's spring.

It turned spring

1 のスル表現である "Spring has come." は実際には文学的で古めかしく、口語的でないため、普段は使われず、1' のように 'be' あるいは 'turn' を用いるのが一般的だという。1' の 'be' は時間的経過を伴わないコピュラ、つまり「デアル」を意味するが、逆にこの場合に使えることは時間的経過の意味を内在させている可能性がある。また 1' の "turn" は変化過程に視点が置かれる表現で、これはまさに「ナル」の語彙的意味を表す。同様に、

- 2 私は来年 40 歳になります。

I'm going to be forty next year.

I'm turning forty next year.

2 の場合、'going to be' は未来時における事態の「デアル」を表し、'be turning' は未来時に向かう時間的経過における変化を 'turn' で表現している。ただし、インフォーマントによると両者の違いは大きくなく、'be' であっても時間幅が感じられると聞く。^{5) 6)} こうした例から、英語においても「ナル表現」と「スル表現」との対立という文脈ではなく、コピュラすなわち「デアル表現」に対する形式として「ナル表現」を考え合わせていくことも必要であり、英語はスルの、日本語はナル的とする対立は慎重に考えることが重要だと考える。

5. 「スルの言語」中国語の場合：モノ的言語のナル表現

中国語の場合、ナル相当動詞は見られない。一般に「ナル」に相当する中国語の動詞として、以下が挙げられる。

生 sheng : 生む「生孩子」・生まれる「孩子生」・成長する・生きる・火を起こす

成 cheng : 成就する・～となる・承諾

変 bian : 変わる・変化する・～になる

化 hua : 変わる / 変える・変化する / させる

為 wei : 為す・行う・～に変わる・～である (古語)

いずれもそれ自体は自他の区別がなく、目的語の有無で表されること、語彙の意味の違いによって異なる漢字が当てられている。つまり、これらの上位概念にあたる、出来や変化などの自発を表す「ナル相当動詞」は存在しない。これについて、英語もほぼ同様に捉えることができる。

生 sheng : 生む・生まれる・成長する … be born, bear, grow

成 cheng : 成就する … develop, achieve

変 bian : 変わる・変化する … become, get [口語的],

化 hua : 変わる / 変える … turn, change,

為 wei : 為す・行う … make (名詞との結合に制約あり)

英語でも基本的に自他の動詞の区別は見られず、目的語の有無で表し分ける。中国語では英語と異なり、ナル表現の一部（主に自然現象）として、次のように主語と動詞の位置を逆転させることで得られる存現文が見られる。(下線部は動詞)

1. 下雨了 (雨が降ってきた)

2. 我家来了一位客人 (我が家に (予期しない) お客が一人来た)

いずれも予期しない事や驚きを伴う事態の出来の場合に用いられる傾向がある。従って、この形式は話し手から見た予想外の出来事が起きた、それに伴い驚きを生じたことを意味する、Mirativity のカテゴリーに属する可能性がある。今後、「ナル表現」を通言語的に考える際に、この概念が関与する可能性がある。

6. おわりに：通言語的な「ナル表現」研究の方向性

以上をふり返ってみると、いくつかの課題と整理すべき点が得られる。

(1). 「ナル表現」とは形態的・意味用法的に、何をもって定義できるか。また、プロトタイプを示すことは可能か。日本語の「ナル表現」をプロトタイプ

とすることには無理があると思われるが、その場合どのような言語が候補に挙げられるか。

- (2). 日本語の「ナル」が語彙的な実質動詞であり、機能動詞としての用法を持たないことの意味は何か。特に「漢語・外来語+スル」が「ナル表現」を実現できるのはなぜか。
- (3). ユーラシアのナル的言語で「ナル相当動詞」の意味用法において抽象化が進んでいると思われる。そのことの意味は何か。
- (4). 「ナル」の主体がモノ的かコト的か、と言う観点で全体を整理する必要がある。これは各言語がモノ的か、コト的かという問題に通じる。
- (5). モノの出来・存在を表すデジタル的なナル表現 VS コトの変化を表すアナログ的なナル表現という対立は観察可能か。
- (6). (4) (5) は話者の客観的事態把握の傾向と、主観的傾向と並行するか。
- (7). 古代日本語の「ナル」には、ユーラシアのナル的言語の意味・用法と通じる点がある。今後は古代日本語の「ナル・ナリ・アル・アリ・キル・ヲル」に見られる出来と存在、およびコピュラの表現を通時的に考察する必要がある。古典語の動的な「アル」が消失して「アル」は静的存在を、「イル」は動的可能性を持つものの存在を、「ナル」は動的存在に内在する変化や推移を、それぞれ専用を表し分けるようになったとも考えられる。⁷⁾
- (8). 「ナル表現」は新事態の出来・変化に関わる。Mirativityの形式という観点から捉えることは可能か。
- (9). モノ・コトの出来・存在、および変化は、認知の生産物である哲学に通じると考えられる。それをどこまで関連させることができるか。
- (10). 「スル」と「ナル」は対立する概念だと言えるのか？

今後も東西「両端」の言語-日本語から英語へを含む様々な言語を視野に入れ、日本語の通時的研究も進めながら、「ナル」の通言語的研究を進めたい。

注

- 1) 古典日本語の「ナル」の用法が他の「ナル」相当動詞に近似する可能性があり、この点も視野に入れて調査する必要がある。例えば、[誕生]は「古事記」に見られる。
- 2) 「おなり」のような「登場・移動による存在」の表現は近世まで見られる。
- 3) 「ナル表現」や動詞「ナル」は、日本人論や日本文化のキーワードという観点からも注目されている。荒木(1985)によると、「日本語の『『なる』というのは～『無かったものがあらたに形をとってあらわれる』『自然に無から有が生じる』、すなわち『自発』『自然展開』の意をもった語である」と述べ、「なる」という動詞のもつ自然展

開的意味が価値として認識されていること」を指摘している。そして、小林秀雄の『無私』を引用し、小林が、「『無私』の態度が事を実現する、可能にする原動力であることを説こうとしている」と説明し、「無私」という概念との関連性を指摘している。こうした「無私」という観点から他言語における「ナル相当動詞」が記述されることは珍しい。ただし、荒木は「ナケレバナラナイ」という形式に注目し、この形式が義務の意味を持つという発想が日本独特のものとしているが、このような「～しなければ+ナラナイ」という形式で義務を表す現象は、本文のようにユーラシアのナル的言語ではよく見られる。ただし、「無私」の概念を覆うものかどうかは検証する必要がある。

- 4) 日本語の「ナル」は変化への傾斜が強いため、「こちら、～にナリマス」のようなナル表現は誤用と見なされるが、ユーラシアのナル的言語のコピュラの用法から考えればあり得ない表現ではない。興味深いのは、そうした背景とは無関係に、若者がこの「ナル表現」をコンビニエンスストアや居酒屋などの場に限られた、断定を回避する点で丁寧さを表す表現であり、注文から商品の受け渡しに至る時間経過を事態の推移として受け入れていることである。
- 5) 池上 (2010) は「印欧語の動詞 [BE] の語源に関して、*bheu-/bhu- はその原義が 'come into being, become' である (Buck1949:635) と推定されるという。また、<生まれる/生じる>→<ある>という意味変化は、民族誕生を語る神話と同様、人間にとって十分に普遍的な心的傾向に根差している」と指摘している。
- 6) イギリス出身のインフォーマント2名によると、イギリスの北部出身の方が変化の表現を好む傾向があり、ドイツ語の 'werden' のような表現に通じると言う。
- 7) 古代日本語の動詞「アル」は貴人の誕生を表し、存在の動詞「アリ」と区別された。阪倉 1978 は、万葉集に現れた古代日本語では「あり」に対する有情物の存在には「をり」「ゐる」が使われ、このうち「をる」は「存在を継続的な状態として把え、これを話し手の立場から様態として描写する」のに対し、「ゐる」は「あるものの存在のしかたを進行的動作として把え、これを具象的に記述する」としている。

参考文献

- 荒木博之 (1983) 『やまとことばの人類学』朝日選書
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- (2000) 『日本語論への招待』講談社
- ・守屋三千代・テキメン・アイシェヌール (2010) 『「ナル表現」再考—膠着語における事態の<主観的把握>の観点から』『認知言語学会論文集』第10号
- 北原保雄編 (2010) 『明鏡国語辞典』第2版 大修館書店
- 阪倉篤義 (1978) 『日本文法の話』教育出版
- 森田良行 (1988) 『日本語をみがく小辞典〈動詞篇〉』講談社現代新書
- 守屋三千代 (2011) 「現代日本語の『ナル』と『ナル表現』—〈事態の主観的把握〉の観点より—」『日本認知言語学会論文集』第11巻 560-563
- (2012) 「現代日本語のナル表現—『ナル文』と『ラレル文』のイメージ・ス

- キーマ」『日本認知言語学会論文集』第12巻 537-542
- (2016) 「日本語話者が見た『ナル表現』」『日本認知言語学会論文集』第16巻 587-592
- (2017) 「ユーラシアの『ナル表現』から日本語の『ナル表現』を再考する」『日本認知言語学会論文集』第17巻
- ・山本美紀 (2018) 「古典語から見た日本語の『ナル表現』」第2回ナル表現研究会
- 守屋三千代 (2019) 口頭発表「ナル表現研究の現在」漢日対比言語学検討会、於西安外国語大学
- 山口明穂・秋本守英編 (2001) 『日本語文法大辞典』明治書院

本稿は、科研費28年度～31年度基盤研究C16K00217「『ナル表現』の認知言語学的研究—類型論を視野に入れて—」に基づく研究である。

守屋三千代 (もりや・みちよ、創価大学文学部教授)

